

## 体育科教育における生涯体育理論の再検討

— E. H. エリクソンのアイデンティティ論のパースペクティブから —

日 下 裕 弘

(1990年10月31日受付)

### 緒 言

体育科教育学は、体育の原理に裏づけられた体育教授学であり、その理論の構築は、体育の現場にうずもれている前理論的命題の掘り出し作業と、教育学や近代諸科学からの理論の援用との両者の総合によってなされなければならない。

近年の社会変化は、体育教育のあり方や学習指導要領に大きなインパクトを与えているが、とりわけ、生涯体育の観点の導入と選択制・個性化の問題は、これからの体育科教育の方向性を示すものとして特筆できる。しかるに現状では、その背景となる確固たる理論が見あたらない。学校体育を生涯体育という観点から位置づけるパースペクティブがきわめて曖昧なのである。そこにあるものは、M. チクセントミハイのありきたりの「フロー概念」によって示唆されている「指導心得」と、一般的な生涯体育の断片的知識だけであり、それ以上に進めないというのが現実のようである。

本研究は、現在の体育科教育において重要な意味をもつに至った生涯体育の構図を考察し、E. H. エリクソンらのアイデンティティ論のパースペクティブからそれを再検討することによって、生涯体育理論の構築のためのひとつの枠組を提示することを目的としている。

もちろん、生涯体育の理論が、ひとつの理論的パースペクティブだけで構築されるものであるとは考えない。そのためには、様々な角度から分析を行なうことによって、柔軟性を保ちながら、現象全体の理解を深めようとする態度が

重要である。しかしながら、エリクソンらのアイデンティティ論は、その中でも特に、我々に深い洞察の糸口を与えてくれる重要なパースペクティブであると考えられる。

### 1. 体育科教育学における生涯体育理論の現状と考察

#### (1) 学習指導要領の構図

平成元年3月に改訂された中学校学習指導要領における生涯体育の構図は、図1の通りである。

即ち、まず、発育発達段階に応じて運動それ自体がもつ「楽しさや喜び」を味わわせ、運動技能を向上させる。「楽しさや喜び」という感情・情動の支えを通して運動を習慣化し、生活の一部としようというわけである。生活における運動の意味は、それに「活力」と「希望」を与えることである。また、そうした過程の中で、潜在的・顕在的に、強健な身体、強い意志、体力の向上、公正な態度、規則を守る、協力・責任、健康・安全といった従来の体育目標も達成することができるというのである<sup>1),2),3)</sup>。

そこには、Funの感情→技能の向上→運動の習慣化→運動の価値づけ→生涯体育という構図が想定されている。学習指導要領のこの構図は、主として、ホイジンガのプレイ論<sup>4)</sup>、チクセントミハイのフロー概念<sup>5)</sup>、および、マズローの至高経験の概念<sup>6)</sup>に準拠している。従って次に、これらの理論的根拠を考察・再検討することによって現在の体育科教育における生涯体育理論に欠けている部分を明らかにしよう。

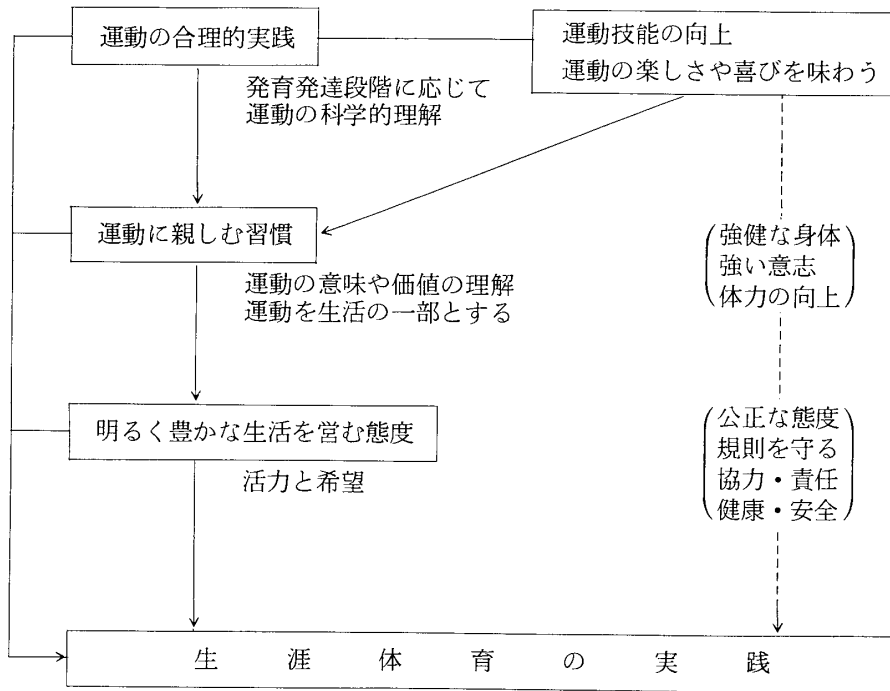


図1. 平成元年中学校学習指導要領における生涯体育の構図

### (2) プレイ論的基礎

ホイジンガのいうプレイの本質は、「人を夢中にさせる何か、非物質的なもの」である。これを感情的側面からみると「Fun」になる。Fun は、表面上、何人にとっても同じ Fun という言葉で表現されるが、その内実は、唯一無二、個人に特有のものである。また、ホイジンガは、その究極の原因を「生命の躍動」としているが、きわめて漠然としたこの概念は、それ以上の記述を許さない。

しかしながら、生命の躍動→ Fun・人を夢中にさせるもの→文化創造の核というホイジンガの図式には、重要な要素が内在している。即ち、「向上心」あるいは「上向きの価値志向」とでもいうべき要素である。それは、Funの深化という考え方と表裏を成している。ホイジンガのいう Fun とは、「いちゃついた」<sup>7)</sup> 遊びの面白おかしさではない。それをはるかに超えたもの、即ち、もっと「緊張」を伴った、「本気」で、「無我夢中」で、そして「没頭」して行うことのできる Fun を意味している。そこでは、「面白い」という感覚それ自体も意識されるこ

とはない。夢中になって取り組むことは、それ自体、深化と向上の過程である。だからこそホイジンガは、拘束のない自由な世界で行なわれるプレイの本質の中に、文化を創造する人間的エネルギーをみたのである。Funに裏づけられたこの深化と向上の要素こそが、ホイジンガの意図した文化要素の中核であり、プレイの本質であったのである。シーデントップのプレイ理解にもこの点が欠落しており<sup>8)</sup>、無秩序な遊びとなってしまう授業を危惧する理由も、この理解の欠如にある。他方、ホイジンガは、プレイを非日常、現実世界の外側での出来事としているが、生涯体育の観点からは、プレイやスポーツの世界も、日常の生活世界や科学、宗教の世界と同様、多元的な社会的な意味世界の一部を構成するものとしてとらえ直すことが必要である。

### (3) フローの原理

プレイやスポーツに夢中になり、没入している時に人間が感ずる包括的感觉は、M. チクセントミハイによれば、「フロー (flow) 経験」と呼ばれる。フロー経験の要素には6つある。

即ち、①行為と意識の融合、②限定された刺激領域への注意の集中、③自我意識の忘却、④自分の行為と環境の支配、⑤首尾一貫性、および、⑥自己目的性である。

フローを確実に生み出す諸活動は、プレーヤーが「退屈」や「心配」を感じることなく行為できる機会を含んでいなければならない。つまり、プレーヤーは、所与のいかなる瞬間においても、行為すべく彼に挑戦してくる限られた数の機会があることを意識しており、同時に、彼の技能——即ち、環境からの要求に対処する能力——をも意識している。換言すれば、フロー活動の原理とは、プレーヤーの技能に関して最適な課題を用意し、自己の諸能力を主体的に啓発させ、よりよき自己を実現させることである。嘉戸は、それを「楽しさの発展モデル」と呼び、このモデルに沿った学習過程を、①挑戦欲求に基づく運動（それは、競争型、克服型、達成型、混合型に分かれる）の学習過程、模倣・変身欲求に基づく運動の学習過程、および、身体的な必要充足に基づく運動（体操）の学習過程に分類し、それぞれの段階的指導法を提示している<sup>9)</sup>。

#### (4) 「至高経験」の享受

スポーツを真剣に行なっている人間は、その技能の行使において自らの意志と身体が完全に調和し、最高のプレーができた瞬間や、厳しくつらい練習に耐えた後に獲得した勝利の瞬間における絶頂の喜悦というものを経験し得る。それは、「遊戯三昧の境」や「不動智」に通じる体験であり、スポーツの魅力、醍醐味といわれるものの本質もそこにある。こうした経験を、A. H. マズローは「至高経験(peak experience)」と名づけた。それは、プレーヤーの人生で最もうれしく幸せな瞬間であり、彼のスポーツ生活において決して忘れることのできない体験である。この状態にある時、プレーヤーは、彼自身が十分に機能しており、強壮な感じがし、自信に満ちあふれ、自己とその小宇宙を完全に支配している。プレーヤー自身がフル回転し、完全に燃焼しきっている状態、熟達したスポーツマ

ンは、人間の機能が頂点に達し、働いているこの瞬間をよく知っている。マズローは、至高経験について話す人々の共通の言葉として、「真理」、「美」、「全体性」、「二分法超越」、「躍動過程」、「独自性」、「完全」、「必然」、「成熟」、「正義」、「秩序」、「単純」、「豊富」、「無礙」、「楽しみ」、「自己充実」等を掲げている。それは、M. チクセントミハイの「深いフロー経験」に一致している<sup>10)</sup>。

#### (5) フロー・モデルによる現在の体育の学習指導の基本的枠組と問題点

以上の考察から、現在の体育の学習指導を、Funの深化を中心に整理したのが図2である。

このように、現在の体育科教育における生涯体育の理論は、主としてスポーツにおけるFunという感情的要素に重点を置き成り立っているが、それ以上には進まない。とりわけ、ライフ・サイクルにおける運動、遊び、そしてスポーツの意味の問題が不明確なままであり、それを支える理論が欠如している。Fun理論を超えた生涯にわたる理論的パースペクティブが切望されている。

#### 2. E. H. エリクソンのアイデンティティ論とその生涯体育理論への意義

次に、このような理論的空白を埋めるひとつのパースペクティブとして、人間の生涯全体にわたってアイデンティティという視角から一貫した理論を提示しているE. H. エリクソン(Erik H. Erikson)の生涯発達心理・社会的モデルを検討し、それを生涯体育の領域に援用することによってライフ・サイクルにおける運動、遊び、スポーツの体育的意義について考察しよう。

##### (1) エリクソンのアイデンティティ論

アイデンティティ(同一性)とは、自己の連続性・単一性、または独自性・不変性であり、個人のこのような同一性の意識的感覚である。それは、「自分であること」、「自己の存在証明」、「真の自分」、「主体性」、「自分固有の生き方や価値観」を意味する。

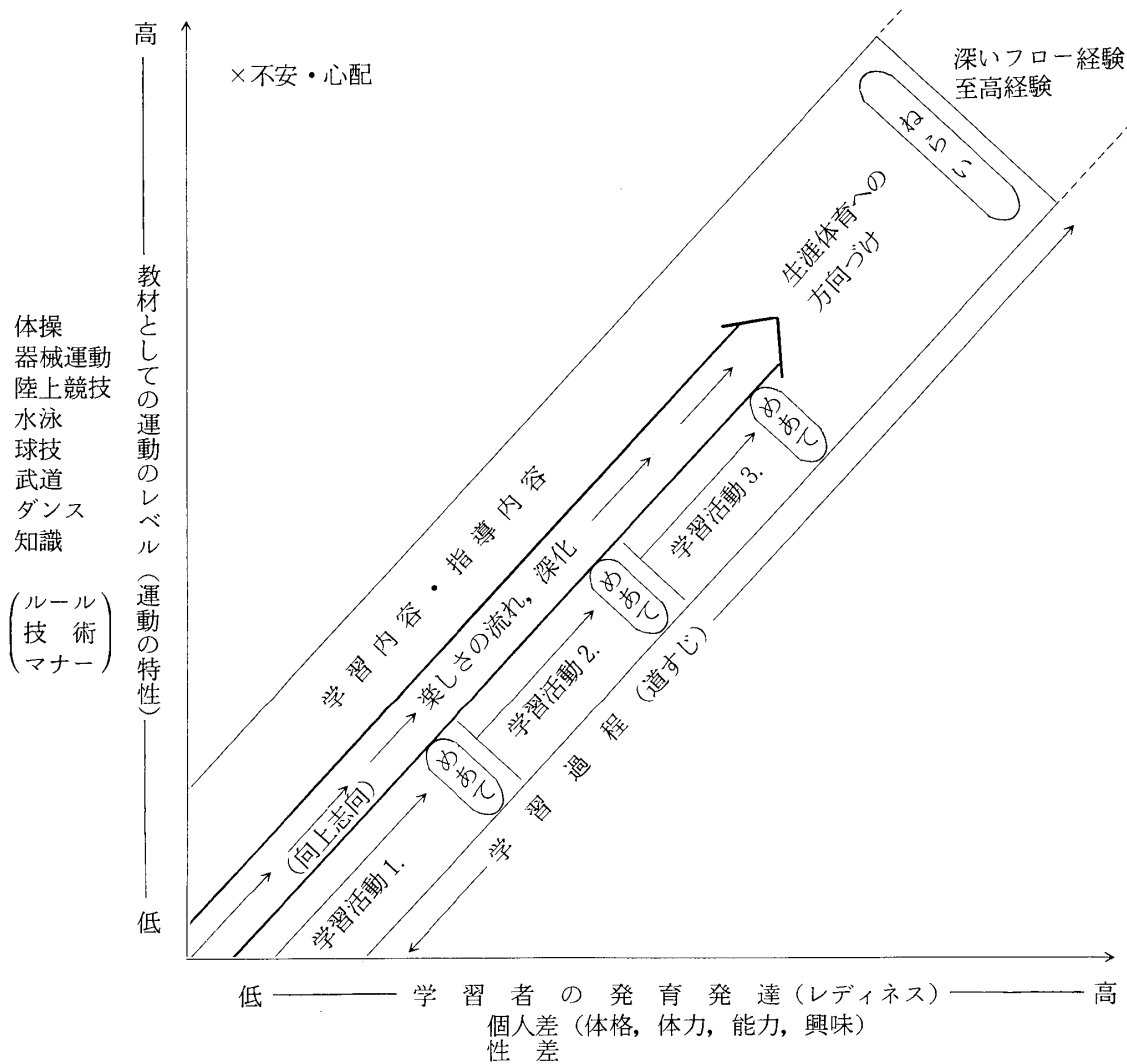


図2. Fun の深化による学習指導の基本的枠組

フロイトに学び、アメリカでの臨床経験によって構築されたエリクソンのアイデンティティ論は、人生周期としての心理社会的な発達の諸段階を規定し、人格が段階的に形成されてゆく漸成論 (epigenesis) の立場をとっている。エリクソンによれば、人間のアイデンティティは一生を通じて形成されるが、人間の基本的素質についてのグランド・プランはあらかじめ存在している。人間は、身体、社会環境、文化、時代といったものの制約の中でしか生きてゆくことはできない。そして、個人のもつ基本的素質は、特定の時期に、特定の課題における危機を迎える。各段階における危機の解決は、その段階の危機を示す相対立した課題の永続的な均

衡をもたらすことによって行なわれる。即ち、課題の対のうち、肯定的な望ましい特性（例えば、信頼）が、否定的な望ましくない特性（例えば、不信）を上回るバランスをもった永続的なパターンをしっかりと確立しなければならない。（バランスが保たれている限り、人間の成長には、むしろ、否定的で望ましくない特性をも経験することが必要なのである。）そうしてはじめて、その段階に固有の人間の活力（徳）が形成される。各段階は、さらに、その段階に必要な重要な他者をもち、特徴的な心理・社会的行動様式をもつ。相互性の概念も重要である。それは例えば、母親と子どものように、それぞれが各々らしくなるのはお互いの存在を通して

であるということである。エリクソンは、対人関係の基本的性格を、他者に働きかけることによって働きかけられ、相手を変化させることによって自己の変革を引き起こしていくものとしてとらえており、「生の弁証法」と呼ばれている。エリクソンの理論が心理・社会的発達理論と呼ばれ、また、アイデンティティが個人の欲求充足だけでなく社会的適応との両過程の弁証法的関係の中で確立されるとする考え方が、こ

の相互性の概念に内包されている。表1は、エリクソンによる個体発達分化に関する以上の理論図式を整理したものである。また表2は、エリクソンの理論とこれまでの人格に関する理論との関係を示している。

次に、こうしたエリクソンのアイデンティティ論を、ライフ・サイクルの各段階ごとに検討し、生涯体育理論への意義について考察しよう<sup>11)~18)</sup>。

表1. エリクソンによる個体発達分化に関する理論的図式

段階	心理・社会的危機所産	人格的活力(徳)	重要な対人関係の範囲	社会価値、秩序に関係した要素	心理・社会的行動様式	儀式化の個体発生	心理・性的段階(フロイト)
I	信頼：不信	希望(のぞみ)	母および母性的人間	宇宙的秩序	得る、見返りに与える	相互的認知	口唇期
II	自律性：恥、疑惑	意志	両親の人間	“法と秩序”	つかまえ、はなす	善悪の区別	肛門期
III	自主性：罪悪感	目的感	核家族的人間	理想的原型(手本)	ものにする(まねる)、らしく振舞う(遊ぶ)	演劇的	エディプス期
IV	勤勉性：劣等感	有能感	近隣、学校内の人間	技術的要素(原則)	ものを造る(完成する)、ものを組み合わせ組み立てる	遂行のルール	潜伏期
V	同一性：同一性拡散	忠誠心	仲間集団、グループ対グループ、リーダーシップのモデル	知的、思想的な将来の展望(イデオロギ-的展望)	自分になり切る(あるいはなれない)、他人が自分になり切ることを認め合う	信念の共同一致	青年期
VI	親密性：孤立(孤独)	愛情	友情における相手意識、異性、競争・協力の相手	いろいろな型の協力と競争	他人の中に自己を見出す、見失う	世代継承的認可	性器期
VII	世代性：停滞性(生殖性)(沈滞感)	はぐくみ世話(いつくしみ)	分業ともち前を生かす家族	教育と伝統の種々相	存在を生む、世話をする		
VIII	統合性：絶望	知恵(英知)	“人類”“私のようなもの”(自分らしさ)	知恵	一貫した存在を通して得られる実存、非存在への直面		

(注) Erikson は、人間生涯(ライフ・サイクル)を通じての同一性形成過程に関して、様々な側面から綿密な理論化を積み重ねている。本表の大半は、これまでも繰り返し紹介されてきたものであるが、個体発達分化の仮説的な理論図式であるので、出来る限り図式と概念的かつ実際的な「対話」を重ねながら、その妥当性の確認と認識の深化を行っていくことが望まれる。なお、各々の領域に関する Erikson の主な出典を略記するので詳しくは原著を参照のこと。心理・社会的危機の所産、重要な対人関係の範囲、心理・社会的行動様式などに関しては、『幼児期と社会』『自我同一性』『主体性：青年と危機』のライフ・サイクルに関連した章を参照。人格的活力に関しては、『洞察と責任』の第4章を参照。儀式化の個体発生、社会価値、秩序に関係した要素については、『玩具と理性』の第2章を参照のこと。(鑑・山本・宮下, 1984, p.17 所収)

表2. 人格漸成論の特徴とその背景

エリクソン理論	関係	背 景
(1) 人格漸成論 ・人格の段階的, 統合的・形成の図式化  ・自我エネルギーの独立性 ・創造的生体エネルギーの想定 ・先天的生物学的基礎と社会化過程の統合	← ←→ ←→ ← — ←	ピアジェ フロイト (幼児期反復, 退行的視点) ライヒ (性格の鑑) ハルトマン (自律的自我) ユング (自己実現), クリス (創造的退行) ハルトマン (成熟と発達)
(2) 人生周期の8段階 ・潜伏期・青年期の重視, 性器期以後の追加 ・器官モードから心理社会的モダリティへ (器官の機能から対人関係へ) ・対概念 (肯定的なものとの否定的なもの)  ・危機概念 (固有の発達課題) とくに青年期同一性の危機——その退行的要素と病理性 ・各段階の順序は普遍的, 解決策は社会で異なる ・エディプス・コンプレックス (女) への疑問 ・個人を時代的, 歴史的契機でとらえる	← ← ←→ — …… ←→ ← — ← ←→	フロイト (リビドー発達の5段階) A. フロイト (思春期の防衛) フロイト (性感帯の部位, 心理性欲の対象充当) フロイト (本能二元論), サリバン クライン (good と bad) フロイト (不安論), ピアジェ (葛藤) ハルトマン 文化人類学, 新フロイト派 新フロイト派 (ホルネー) 新フロイト派 フロイト, ハルトマン
(3) 相互性——生の弁証法 (鑑)	←	ハルトマン (平均的期待の環境への先天的適応機制)
(4) 世代の継承 (社会・歴史・文化の価値観の積極的伝達・継承)	……	フロイト (上位自我, 自我理想)
(5) 徳目の想定 (人格の活力)  ・個人を社会の目標との関係でとらえる	←→ — ←	フロイト, ハルトマン 実存的, 人間学的 アドラー (社会的関心), ホルネーら新フロイト派

(— 関係・共通点あり, ←→ 対照的, …… やや関係あり, …… 影響あり)

(遠藤, 1988, p.40 所収)

(2) アイデンティティ論の生涯体育理論への意義

I. 乳児期 (誕生から1・2歳ごろまで)

— 希 望 信頼：不信 —

この段階の人間の活力 (徳) は, 「希望」である。それは, 母親との相互作用における母親への信頼によって形成される。それは, 人間や世界といった宇宙秩序への希望・楽観であり, これがアイデンティティの基礎となる。その反対が, 不信, サディズム, そして抑うつ傾向である。この時期には, 自他の区別が付き, 社

会的対象への愛着を感じ, 感覚的・運動的身体機能が発達する。従って, この段階の中心的過程は, 母親との相互作用における信頼を獲得し, 「希望」をもつことによって, それを基盤に環境を探索することであるといつてよいだろう。基盤がしっかりしている限り, 感覚的・運動的機能の働きそれ自体が, 乳児にとっては快感であり, よろこび (pleasure) なのである。

シーリー (Shirley, 1961) は, この時期の感覚運動の側面における課題を, より具体的に表3のように示している<sup>20)</sup>。

表3. シーリーによる運動機能および移動能力の発達

0 カ 月	1 カ 月	2 カ 月	3 カ 月	4 カ 月	5 カ 月	6 カ 月	7 カ 月	8 カ 月	9 カ 月	10 カ 月	11 カ 月	12 カ 月	13 カ 月	14 カ 月	15 カ 月
胎児の姿勢	あごを上げる	ひじを立てる	物に触れようとする	支えられて座る	ひざの上に座り、物をつかむ	高いすに座り、ぶら下っている物をつかむ	ひとりで座る	支えられて立つ	家具につかまって立つ	はいはいする	導かれながら歩く	家具につかまって立ち上がる	階段をのぼる	ひとりで立つ	ひとりで歩く

Ⅱ. 歩行期・幼児前期 (1・2歳ごろから  
3・4歳ごろまで)

—— **意志** 自律性：恥・疑惑 ——

この時期には「意志」という人間の強さが発達しなければならない。意志とは、自由な選択とセルフ・コントロールを行使しようとする決断である。それは、両親との相互関係における受容やしつけの過程において「自律性」対「恥・疑惑」の心理・社会的危機をのり越えることによって獲得される。自律性を獲得するための主たるメカニズムは「模倣」である。

フロイトによって「肛門期」と名づけられたこの時期の子どもは、排便のしつけを通じて、自分の行動が自分のものであることに気づく。自分ひとりでしたことがうまくできるたびに自律感を育ててゆく。失敗の経験は、自分が未熟で愚かな存在としてさらしものにされているという恥の感覚か、または、疑惑という二次的な不信の感情を生む。両者のバランスにおいて自律感がまさっているなら、「保持」と「放出」の統制が可能となり、劣等感を生まないですむ。

即ち、この段階には、「保持すること」と「放出すること」といった筋肉系の能力をも含めた諸能力が発達する。前者は、例えば、「手に入

れて大事にする」といった一種の世話をやくパターンにもなり得るし、逆に、破壊的で残忍な保持や拘束にもなり得る。同様に後者も、くつろいで「あけ渡し」たり、「あるがままにさせる」ことにもなり得るし、逆に、破壊的な力をこめた敵意にみちた放り出し方をすることにもなり得る。こうした行動に善悪の意味を付与するのは、社会の文化、とりわけ両親との相互作用の過程である。こうした技能学習の主要な手段は「模倣」である。模倣を通して子どもは、自分の欲求を表出し、他者の行動に影響を及ぼすことを可能にする技能を発達させていく。カイヨクのいうミミクリーの遊び<sup>21)</sup>は、この段階で大きな意義をもつ。

身体運動との関連でこれをとらえるなら、歩く、走る、ジャンプする、飛びおる等の移動能力の完成が、また、ピアジェの遊戯心理学との関連でとらえるなら、「空想の遊び」や「象徴的遊び」が、それぞれ重要な発達課題となる。もうひとつの重要な発達課題は、セルフ・コントロールである。セルフ・コントロールは、水あそび、砂あそび、雪あそびといった自然的環境における諸経験を通じた場合においても2つの異なった方向で発達する。ひとつは、衝動

の表出をおさえたり、修正したりする能力であり、もうひとつは、環境内の課題をやり遂げるという能力である。丸山らは、主としてD. ガラフューの運動の発達段階に準拠して幼児前・後期の運動教育のテーマとして、身体意識の向上、安全学習、移動の運動、操作の運動、バランスの運動、リズムカルな運動、および、表現運動を挙げている<sup>23)</sup>。

### Ⅲ. 幼児後期・学童前期（4・5歳ごろから6・7歳ごろまで）

#### —— 目的 積極性：罪悪感 ——

この時期には、「目的」という徳が発達する。それは、価値ある目的を想定し、遂行しようとする勇氣であり、これを獲得するためには、「積極性対罪悪感」という心理社会的危機をのり越えなければならない。そのための中心的な学習過程は、「同一視」である。

学童前期は、成人期にまで持続する発達課題に対する働きかけが開始される時期である。この時期の性役割同一性は、青年期において個人の同一性の中核的な要素として再統合される。道徳的発達、人生哲学のなかに組み込まれながら、生涯全般を通して持続する。論理的思考の発達は、成熟した推理を可能にし、抽象的概念化へと向かわせる。仲間との遊びが増加するにつれて将来への展望、社会的受容、仲間との親密性に対する喜びなどがもたらされるようになる。

自分が一個の人間で「ある」ことをしっかり確信した子どもは、今や自分が「どんな種類の人間に」なろうとしているかについて知らねばならず、環境に対して積極的に探索しようとする。両親との同一視は、理想的自己像や道徳的規制の内容が子どものパーソナリティの中に組み込まれる過程である。子どもがそれまでに内在化させてきた是認や理想に対応するように、自分の行動をコントロールすることができないと、その程度に応じて彼は罪悪感を感ずる。反対に、子どもの行動が理想に近づき、内在化している是認・理想と一致するならば、彼は自信をもち、積極的になる。

「積極性の偉大なる統治者」である「良心

(conscience)」は、道徳性の礎石となる。良心によって支えられた積極性は、創造性、好奇心、冒険心等を開発する。この時期には、家族だけが子どもの唯一の影響源ではなくなる。幼稚園、仲間、近隣、テレビなど、すべてがこの段階での自己概念の形成に影響を与える。従って同輩仲間との冒険や好奇心の追求、および集団あそびに含まれる様々な道徳的要素といったものが、この時期の体育には重要である。特に、集団遊びは、認知的複雑性や身体的技能の発達に関係している。そこでのゲームは、空想という要素と仲間との協力という要素を結びつける。集団遊びは、歩行期の子どものきわめて自己中心的な活動と、学童期の子どもの構造化されたチーム・ゲームとの間の過度的な遊びとなる。そこには、役割関係の相互的な性格を経験する豊富な機会が存在している。

### Ⅳ. 学童期（7・8歳ごろから12歳ごろまで）

#### —— 能力・適格性 ——

#### 勤勉性・生産性：劣等感 ——

人間のパーソナリティは、「与えられる存在」から「意志する存在」、「かくありたいと想像する存在」へと発達したが、今や「学ぶ存在」へと近づいた。この時期の子どもは、「能力（適格性）」——即ち、自らの技能と知能とを自由に行使する能力——という仕事（課題）に対する基本的態度を発達させる。それは、「勤勉性（生産性）」と「劣等感」との肯定的バランスによって獲得されるが、そのための中心的な学習は、「教育」によるものである。

学童期の子どもは、その後の人生段階で重要な意味をもつ仕事や社会的技能に対するある種の態度を発達させる。それは、学校に関連した技能、社会的協力、自己評価、仲間集団への参加に関する諸能力を増大させる。「勤勉性」の感覚は、勉強に対する積極的な志向性であり、技能習得の可能性についての自信の感覚である。それは、成功に対して強く動機づけられ、成功するような状況において高められる。失敗に対する恐れや、成功に対する強い恐れを喚起



させる状況は、劣等感を生み出す。

従ってこの時期の子どもはいろいろな経験を通じてだれしませんが、自分には能力があるのだという喜びや達成感を味わうことができなければならない。すべての分野を上手にやり遂げる子どもはほとんどいない。勉強に自信のある子どもでも、身体的遊びやスポーツで有能な子どもでも、どこかの分野ではある程度の劣等感を経験している。エリクソンによれば、大人の遊びが「レクリエーション」としての意味をもつのと違って子どもの遊びは「現実の支配 (real mastery)」を意味する。従って、学校でチーム・スポーツを教材として与えたとすると、子どもたちは、チームの成員として集団目標の優先、分業の価値、および競争について学習することになる。ニューマンらは、それを表4のようにまとめている。そこには、内集団と外集団との反目の永続化というチーム・スポーツの体育的

逆機能の側面が指摘されている。制度化されたスポーツは、「零和ゲーム」であり、同数の勝利経験と敗北経験を必然的に、また結果として生み出す。勝利が成功であり、敗北が失敗であると評価することは、優越感と劣等感を同じ数だけ生み出すことになる。従って、この時期の遊びやスポーツは、その「与え方」や「評価の仕方」が重要になる。例えば、誰もが「勝利者」になれる機会を保障することや、技能の習得それ自体を「成功」と見なすことなどである。技能を獲得していく過程を通して、多くの子どもは成功を経験する。失敗はむしろ、将来の成功のためのステップとなる。かくして子どもは、「勤勉さ」が価値ある能力を獲得する有効な態度であることを学ぶ。そのためには、子どもには「手助け」が必要であり、最終的な成功を経験できるように、また、目標達成のための努力ができるように「励ますこと」が重要である。

表4. チーム・プレーにおける経験の結果としての態度の発達

内 集 団 的 態 度	外 集 団 的 態 度
子どもが学ぶこと：	子どもが学ぶこと：
1. チームの目標を価値づけ貢献する	1. 競争の結果が勝利か敗北に終わること
2. チームの目標のために個人的目標を断念する	2. 相手のチームは敵であること
3. チームのメンバーからフィードバックや助けをうける	3. 相手を打ち負かすために最大の努力をしなければならないこと
4. 大きな組織の単位として自分の役割を価値づけ相互依存性を認識する	4. チーム同士互いに反目しあい、そうしなければならないこと
5. チームの勝利が個人の満足に結びつくこと、チームの失敗が欲求不満や失望の原因となることを認識する	5. 相手のチームを助けること(利敵行為)は悪いことであること

(B. M. ニューマンとP. R. ニューマン, 1988, p. 233 所収)

V. 青年期 (12・13歳ごろから20代前半まで)

—— 忠 誠 同一性：同一性拡散 ——

青年期は、子どもと大人の、そして個人と社会の分岐点である。また、この時期には、エリクソンの8つの段階に顕在化する心理社会的「所産」とその「萌芽」が見られる。例えば、

乳児期に培われた「基本的信頼感」は、青年期には、「時間的展望」となって現われる。(図3)、図3の「V青年期」の横の欄の上部の各構成要素が アイデンティティ 同一性の下位カテゴリーであり、下部が アイデンティティ 同一性拡散の下位カテゴリーである。

また、アイデンティティ 同一性は、生涯にわたる重要な存在への「同一化群」を母体として形成される。

	1	2	3	4	5	6	7	8
I 乳児期	信 頼 対 不 信							
II 幼児前期		自 律 性 対 恥, 疑 惑						
III 幼児後期			自 主 性 対 罪 惡 感					
IV 学童期				勤 勉 性 対 劣 等 感				
V 青年期	時 間 展 望 対 時 間 拡 散	自 己 確 信 対 同 一 性 意 識	役 割 実 験 対 否 定 的 同 一 性	達 成 の 期 待 対 労 働 麻 痺	同 一 性 対 同 一 性 拡 散	性 的 同 一 性 対 両 性 的 拡 散	指 導 性 と 服 従 性 対 権 威 の 拡 散	イ デ オ ロ ギ ー へ の 帰 依 対 理 想 の 拡 散
VI 成人前期						親 密 性 対 孤 立		
VII 成人期							世 代 性 対 停 滯 性	
VIII 老年期								統 合 性 対 絶 望

図3. 心理・社会的危機と同一性に関する個体発達分化図式

→印は、各発達段階に顕在化する心理・社会的危機の変化した所産を示し、…→印は、青年期における萌芽と顕在化した成人期の危機を示す。

(鑑・山本・宮下, 1984, p.28 所収)

この時期は、運命的な「育ち」に拘束された自分から、主体的に社会の中に「人生」を位置づけていく自分へと転換していく時期でもある。その意味で、青年期は「心理社会的モラトリアム」の期間なのである。青年はまだ、勉強中、修業中の身であるので、社会的な責任や義務を果たすことを最少限にし、<sup>モラトリアム</sup>猶予される時期である。このモラトリアム期における青年の生活の中心的過程は、試行錯誤による「役割実験」であり、「社会的な遊び」である。役割実験とは、青年期に至るまでに同一化によって形成された

様々の「～としての」自分、つまり複数の自己を、対人的・社会的現実や役割に暫定的に結びつけ、自分の可能性を生きてみることである。実験であり、一種の「ごっこ遊び」であるから、いつでもおりにすることができし、簡単に別の自分を演じてみることもできる。モラトリアム期において自らの同一性を希求し模索する自我の自由な活動のひとつが社会的遊びである。エリクソンにとって遊びとは「限界つきの自由」——与えられた制限枠の内、自らの自由な活動の可能性を試みること——を意味する<sup>24)</sup>。

即ち、青年は、この遊びの時期を通じて「育ち」という帰属点を一時的に離れ、社会的現実の許す範囲で、気のおもむくままに主体的な活動を試み、様々な可能性を演じながら、社会的現実の中に、「自分らしい自分」を発見し、自覚していく。スポーツは、青年に対してあるひとつの役割実験の場を提供するものである。

さらに、この時期には、自分の支えとし、準拠枠としている集団（民族、国家、派、仲間）との主観的、内面的な連帯感ないしは帰属意識としての集団的同一性が発達する。それは、「内奥の漠然とした感情的な力」であり、「内的構造を共有しているというひそかな安心感」である。この感覚は、自らの同一性をゆるぎないものにするための重要な側面である。なぜなら、心理社会的同一性の形成は、個人の核心と支えとなる社会の核心に同時に定位され、根づいていく過程だからである。この過程においてその集団が共有する価値体系を自分の中に受け入れていき、徐々に内面的な再構成・再統合が行われていく。青年が希求するこの価値体系を、エクソンは「イデオロギー」ない

し「イデオロギー的世界像」と呼んでいる。このヴィジョンが、青年の希求する同一性と一致し調和する時、青年はそれを選択し受容する。このような心理社会的同一性を促進させる人格の活力、つまり、青年期に最も活性化される自我の内在的な力が、「忠誠心」である。即ち、それは、「価値体系の避け得ざる矛盾にもかかわらず、自らの選んだものに深く馴れ込み、従っていこうとする能力」なのである。<sup>25)</sup>

次に、同一性拡散の症状を概観することによってその逆の特性である同一性の下位カテゴリーを確認しよう。同一性拡散を示す境界状態の特徴は、表5のようにまとめることができる。表中の「積極的選択」、「打ち込むもの」、「他者との親密なかかわり」、「内的な連続性と斉一性の感覚」、「『やった』という達成感や解放感」、「主体的な意志による『望み』の実現」、および「時間的展望」といった事柄は、スポーツの実践において誰しもが経験し得る同一性の感覚・状態である。体育の立場からは、その感覚や経験の意味づけが問題となる。

表5. 同一性拡散の諸症状

アイデンティティ 同一性拡散	アイデンティティ (同一性)
① 優柔不断、選択の回避、消極的モラトリアム（積極的選択）	
② 打ち込むものなし、意欲なしの麻痺状態、「まだどうにかなる」と信じ込もうとする（打ち込むものや忠誠をつくす人物がある）	
③ 現実との生きた相互性を失う、むなしさ、孤立感（他者との親密なかかわり）	
④ 自分を見失い、自分が何を求めているのかわからない（内的な連続性と斉一性の感覚）	
⑤ 他者の視線への集中、対人的不安・恥づかしさの感情、過剰な同一性意識、自意識過剰	
⑥ 空しさ、焦躁感、緊張（「やった」という達成感や解放感）	
⑦ 偶然に身をまかせだけ（主体的な意志による「望み」の実現過程）	
⑧ 時間に対する不信、希望の喪失、刹那的（時間的展望）	
⑨ 同一性の混乱と喪失、放棄、不安と敵意、絶望と孤独、基本的不信感（基本的信頼）	

注) 表5は、山本力の議論（鐘ほか編，前掲書，pp.29～30）を筆者がまとめたものである。

ここで、アイデンティティとその下位カテゴリーの意味するものをスポーツにあてはめてエリクソン理論の体育的意義を探ろう。スポーツの場における

体育的役割実験の機会には豊富である。表6は、その機会を、スポーツ・アイデンティティの下位領域として例示したものである。

しかしながら、それらが強制によってなされた場合には、きわめて「息のつまる」ものとなる。主体的選択、自発性、もしくは「やる気」の重要性がここにある。また、スポーツでの体験・体感には、表6に例示したものとは正反対の、

スポーツ・アイデンティティ拡散の事例も豊富にあることを忘れてはならない。従って「スポーツ教育」という用語法は、それ自体多くの矛盾を含んでいるといつてよい。

表6. スポーツ・アイデンティティの下位領域

アイデンティティ 同一性	人間的 活力	……………	スポーツ・アイデンティティの事例
時間展望	希望	……………	スポーツと「希望」(好き, ロマン) ex), スポーツは大好き 努力すればできる, 努力したい
自己確信	意志	……………	スポーツと「意志」(自分にもできる) ex), いっちょうやってみよう 自分の技能や身体への確信
役割実験	目的	……………	スポーツと「目的」(目標を達成しようとする勇氣) ex), 目標に向かって練習 ゲームで勝とう
達成の期待 (見習修業)	能力	……………	スポーツと「能力」(スポーツ技能) ex), 能力を最大限に発揮しよう 技術をマスターしよう 技能を向上させよう
性的同一性	愛	……………	スポーツと「性」(男らしさ・女らしさ) ex), 男らしくやろう (支配性, 活動性, 有能性) 女性スポーツの意味 他者の理解
指導性・ 服従性	世話	……………	スポーツと「世話」(リーダー, フォロアー) ex), 指導, 助言 人間関係, 他者の世話 リーダーシップ, フォロアーシップ
イデオロギ ーへの忠誠	英知	……………	スポーツと「英知」(スポーツ・イデオロギー) ex), 私のスポーツ信条 人生におけるスポーツの意味
アイデンティティ 同一性	(主体性・存在証明)	……………	スポーツとわたし ex), スポーツでの充実感・よろこび 自分が良くわかる スポーツは私にとってなくてはならぬもの

また、スポーツ・アイデンティティと深く関連する感覚として、Funの感情があるが、その中には、表7のような「楽しさ」が報告されている。特に多いのは、表中⑤の「勝利の瞬間」であり、その過程が苦しく、また勝利の可能性が

小さければ小さいほど、「勝利の喜悦」は大きい。また、こうした自己の内的報酬の背後には、社会的期待や承認といった外的報酬の要因も存在している。満足感、充実感、達成感、克服感、共感等を含む Funの機会を、スポーツは、豊

富にもっている。E. E. シュナイダーがいつているように、プレーヤーにとっては、プレーし、

自らのアイデンティティを確証する機会が重要なのである<sup>26)</sup>。

表7. スポーツの楽しさ —「最もうれしかったこと」・「喜びの瞬間」—

① 活動そのものに関するもの	ゲームをすること自体、試合に出れたこと、熱中（一生けんめい）できたこと、最後までやり遂げたこと、良い試合ができたこと、接戦, etc.,
② 技能の発揮に関するもの	やりたいことができた、自分の力が出せた、自分の思った通りのプレーができた、ファイン・プレーができた、自己表現, etc.,
③ 「得点」そのものに関するもの	得点した・トライ・スマッシュ・ゴール・シュート・スパイク・投げた・ホームランを打った・三振をとった・記録が出た・自分が貢献できたとき, etc.,
④ 技能の習得・向上に関するもの	技術をマスターできた、うまくなった、できないものができるようになった、記録がちちんだ・のびた、演技が完成した、克服、自分に勝つ, etc.,
⑤ 勝利への過程と結果に関するもの	競争の激化 → 苦しい練習 → 接戦 → 勝利 → 社会的承認 今まで勝てな 努力がむくわ 逆点・優勝・勝利の メダル・胴あげ・拍手・祝福・他人 かった相手・ れレギュラー 瞬間、応援にこたえ に認められる・目だつ・有名になる、 ライバル になれた られた 「すげえなあ」といわれた、「いい男」になれた, etc.,
⑥ 人間関係に関するもの	友人・上・下級生・コーチ・先生とのつながり・深まり、後輩にたよりにされる、先生にほめられる、気持ちを通い合う、全員が一丸となって、苦楽の共有、旧友とのなつかしい話, etc.,

注) 表7は、平成2年10月、S大学体育学部2年生(男女)254名を対象に行なった筆者の「スポーツをして最もうれしかったこと・喜びの瞬間」に関する自由回答式の調査結果を、関連すると思われるいくつかのカテゴリーに整理したものである。

中込らは、S. H. ディグナンの <sup>アイデンティティ</sup> 同一性の主体的感覚(そこには、自己感覚、独自性、自己受容、对人的役割期待、安定性、目的指向性、対人関係の7つの下位領域がある)の概念に準拠して、因子分析による「<sup>アイデンティティ</sup>スポーツマン的同一性」の尺度構成を試みている。中込らのこうした一連の研究が一貫して強調しているのは、青年期の <sup>アイデンティティ</sup> 同一性とスポーツ・アイデンティティ、および、自我発達の三者の関係の分析である<sup>27), 28), 29)</sup>。筆者は、その中心となる概念を「スポーツへの自我関与の程度」であると考え、スポーツへの取り組み方、スポーツに対して自我をどの程度関与させているかとい

う問題は、スポーツ価値観、スポーツ・<sup>アイデンティティ</sup>アイデンティティ、および、それらを含めた青年の <sup>アイデンティティ</sup> 同一性に大きく影響するはずであるからである。

また、市村は、青年期のスポーツ経験が、スポーツのもつ <sup>アイデンティティ</sup> 社会規範を学ぶ機会を提供すると同時に、自我 <sup>アイデンティティ</sup> 同一性形成という心理社会的発達課題に対する取り組みから <sup>アイデンティティ</sup> 回避させる働きをもつとして、青年期の <sup>アイデンティティ</sup> 同一性形成におけるスポーツ・アイデンティティの逆機能的側面——即ち、将来の職業選択の回避と麻痺状態、<sup>アイデンティティ</sup> 否定的同一性の選択(スポーツへの逃避)、<sup>アイデンティティ</sup> 同一性意識の過剰(現実のスポーツ化)な

ど——を指摘している。こうした視点は、スポーツが「あるひとつの役割実験」であることを忘れた場合に生じる弊害である。カイヨワは、現実にもどれない遊び手を「狂気」と呼んだ。

さらに、青年期の前半（中学・高校時代）には、仲間集団における成員性、構造化された集団での友情・共有・妥協・思いやり・信頼が発達するし、仲間集団へのアイデンティティ（集団的アイデンティティ）——仲間に受け入れられたいとする欲求や集団規範への同調——を獲得することによって、自ら制約した価値や考え方に忠誠を維持しようとする。それ故、青年前期における集団スポーツがもつ体育的意義は特に大きい。従ってスポーツ仲間集団関係をつくりあげることができるような体育的環境が必要となろう。

さらに、青年期の後半には、道徳性が内在化し、個人的アイデンティティを獲得することによって、意味のある統合された抽象的な価値体系にコミットメントしようとする。従って、この時期は、自分にあったスポーツや運動の意味やその行ない方の規範を考慮する時期として重要である。特に、フェアプレーやスポーツマンシップがスポーツでの「闘魂」に内在するものではなく、スポーツ世界そのものとは別の社会的・倫理的高みから人間が付与した倫理であることに注意する必要がある。

## VI 成人前期（20代後半から30代まで）

—— **愛** 親密性：孤独 ——

児童期と青年期の終りがくると人生が始まる。それは、特定の経歴としての仕事とか研究であり、異性との交際からやがては結婚して自分の家庭をもつことを意味している。この時期には、「親密な関係」（即ち、友情、愛、性的親密さ、および、自分自身をも含めた関係）が重要である。「親密性」とは、自分と他者のアイデンティティを相互に危険にさらすことなく融合する能力であり、その反対が「孤独」である。この時期の徳は、従って「愛」であり、それは献身の相互性を意味する。

この時期は、家庭、仕事、そして余暇を含めたライフ・スタイルを形成する時期である。従って成年前期には、特に、配偶者、家族、友人等とのスポーツや運動が重要になろう。一方、エリクソンは、大人の「遊び」を「レクリエーション」として見ているが、換言すれば、それは、現実（「俗」）から「遊」への離脱<sup>31</sup>を意味する。離脱を通して人は、人生の全体性を確認し、チェックする。成人期全般の生涯体育理論は、この「遊」の今日的意味を問わなければならないだろう。

## VII 成人中期（30代から50代まで）

—— **世話** 生殖性：停滞 ——

この時期の徳は「世話」であり、生まれ出たものに対するかかわりに傾倒すること——例えば、他人に対する関心・気づかい・大切にすることや、他人に知識・経験を伝達すること——である。「生殖性」は、親であることに関連しており、次の世代の確立と指導に対する興味・関心のことである。それは「産む」ことを意味する。子ども、生産物、観念、そして芸術作品等を産み出すことである。それは、文化に対して重要な貢献をなす。この時期に人は、仕事、家庭、育児・教育を通じて自分の価値志向、道徳律、気質そして技能を明確化していく。社会的影響を与える能力を身につけ、人と環境との相互作用を通じて何かを創造していく。この感覚には、特定の他者に対する愛情が必要となるが、それは、家族から社会集団へと拡大していく。

従って、この時期の人々には、前述した「離脱」による生全体の相対化機能に加えて、「遊」領域でのリーダーシップ、集団への指導・貢献、メンバーの要求への対応能力といった事柄が課題となろう。

## VIII 成人後期（60歳ぐらいから）

—— **英知** 統合・完全性：絶望 ——

「統合」とは、自分の人生と死を受け入れ、現在の状況と共に過去の歴史を統合し、その結果に満足する能力のことである。統合（「自我

の完全性」)の所有者は、自分自身のライフ・サイクルの相対性と歴史性、そして尊厳を自覚している。その反対は「絶望」である。それは、「人生は無意味である」とか、「終り(死が近い)」という感情を増幅する。統合と絶望との遭遇から「英知」という円熟した徳が発展する。

老化に伴い、身体的諸能力は低下する。しかし、英知は、「内省」という自己の再評価を通じて新しい役割へエネルギーを方向づけ、人生に対する新しい展望を獲得させる。

人生の最終段階であるこの時期に、エリクソンは、積極的な意味を付与する。それは、シモーン・ド・ボーヴォワールの次のような見解と一致している。

「老いがそれまでのわれわれの人生の哀れなパロディーでないようにするためには、ただ一つの方法しかない。それは、われわれの人生に意義を与えるような目的を追求しつづけることである。それは、個人、共同体、公共福祉などへの献身でもよいし、社会的あるいは政治的な仕事、知的、創造的な仕事でもよい。……情熱こそわれわれがいたずらに過去をなつかしむことのないようにするのである。われわれが、愛や友情や義憤や同情をとおして、他者たちの人生に価値をおくかぎり、人生は価値をもちつづける。……(この時期のための準備ということに関しては、)むしろ老後のことなどあまり考えずに、たとえあらゆる幻想が失われ、生命の熱気が冷めたのちにもなおそれを保ちつづけるほど、心を打ち込んだ、意義ある人生を生きるべきであろう。……(しかし、歴史と社会は未だにそれを承認するまでに至っていない。)……理想的社会では、老いはいわば存在しないだろう、と夢想することができる。老人たちの境涯がどのようなものであるかを理解したとき、人はもはや年金の増額とか衛生的な住居、組織立てられた閑暇などといった、現状より少し気前のよい「老年対策」を要求するだけで満足することはできないだろう。それは体制全体にかかわることであり、権利要求は根元的であるほかはない、すなわち、人生を変えること、以外にはないのだ。」<sup>32)</sup>

(傍点 筆者)

ボーヴォワールがいつているように、「充溢した老い」を生きるためには、若い世代にその

準備ができていなければならない。しかし、もしそれがただ金を貯金し、隠居所を選定し、趣味をつくっておくというようなことであるならば、いざその時期になったとき、大して役には立たないだろう。

「スポーツを生活の一部とする」とはいかなる意味においてなのであろうか。スポーツは生活の中にどのように位置づくのであろうか。スポーツを自我に深く関与させ、継続的にそれを行ってきた人々であるなら、人生におけるその意味を、その経験的深みの中から統合することができよう。

老人の閑暇を満たすために、上から与えるスポーツが意味を持つはずはない。「ゲートボール」のイメージは、充実した人生を前向きに考えながら過ごす「老人」のイメージと一致するのであろうか。運動やスポーツは、それが主体的に行なわれるかぎり、「老人」の活発さを保ち、快適な社会関係を維持し、自分にはまだ能力があるのだという気持ちをもちつづかせるといふ意味をもち得る。しかし、「老人」の「英知」と「老人」の運動・スポーツを結びつける理論はまだできていない。

### 3. 結 語

以上、E. H. エリクソンらの生涯発達に関する理論的パースペクティブから、生涯にわたる運動・遊び・スポーツの体育的意義について考察してきたわけであるが、それらを、ニューマンらによるエリクソン理論の新しい発展を考慮してまとめたのが表8である。

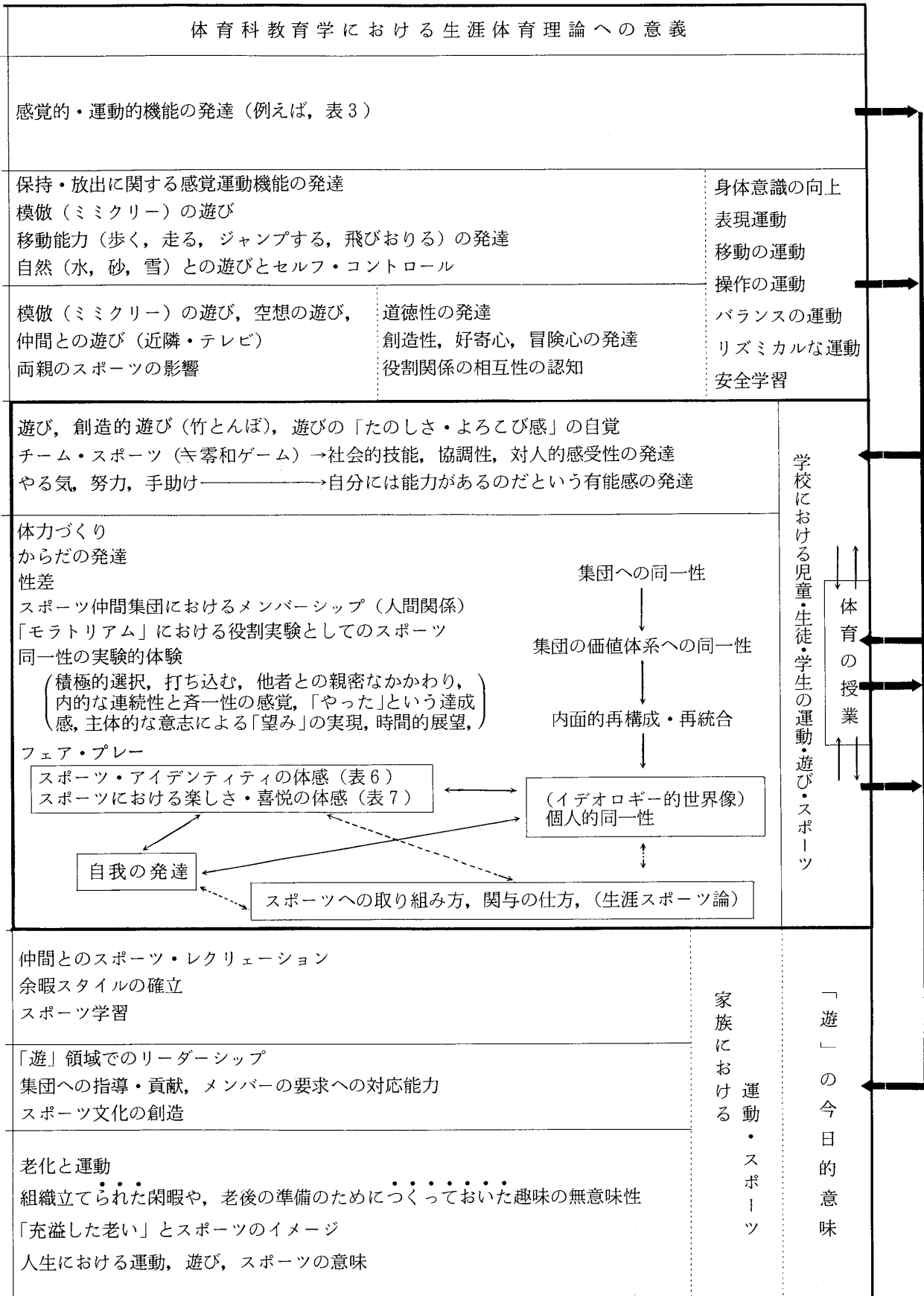
人は、「自分に適したことができる」ということ、これが「喜び」なのである。能力に応じた課題を享受する、という「楽しさのモデル」は、これまで考察してきたように、生涯体育の観点から、ライフ・サイクルの発達課題(人間の活力)に適合した、あるいはそれを基盤とした「スポーツ・アイデンティティ」のモデルへと再構築される必要があるだろう。そのためには、発育発達の理論、心理学の諸理論、役割理論、シンボリック相互作用論、および、運動そのも

表 8. アイデンティティ論

ライフ・ステージ	人間の活力	心理社会的危機	重要な他者	発 達 課 題	中心的過程	心理社会的行動様式
乳 児 期	希望	信頼：不信	母および母性的人間	社会的愛着 感覚運動的知能と原始的因果律 対象永続性 感覚的・運動的機能の成熟	養育者との相互性	得る， 見返りに与える
歩 行 期	意志	自律性 ：恥・疑惑	両親および両親的人間	移動能力の完成 空想と遊び 言語の発達 セルフ・コントロール	模倣	保持すること 放出すること
幼児後期	目的	積極性 ：罪悪感	核家族的人間	性の同一視 具体的操作 初期の道德性の発達 集団遊び	同一視	ものにする（まねる） らしく振まう（遊ぶ）
学 童 期	有能感	勤勉性 ：劣等感	近隣学校の人間	社会的協力 自己評価 技能の習得 チーム・プレー	教育	ものを造る（完成する） ものを組み合わせ組み立てる
青 前 期	忠誠	(集団的同一性)  同一性 ：同一性拡散  (個人的同一性)	仲間集団 集団対集団	身体的成熟 形式的操作 情動の発達 仲間集団における成員性 異性関係	仲間の圧力	自分になりきる（あるいはなれない）  他者が自分になりきることを認め合う
年 後 期			リーダーシップのモデル	両親からの独立 性役割同一性 道德性の内在化 職業選択		
成人前期	愛	親密性：孤立	友情における相手意識，異性，競争・協力の相手	結婚 出産 仕事 ライフ・スタイル	仲間との相互性	他者の中に自己を見いだす。（見失う）
成人中期	世話	生殖性：停滞	分業ともち前を生かす家族	家庭の経営 育児 職業の管理	人と環境との相互作用と創造性	存在を産む 世話をする
成人後期	英知	統合・完全性 ：絶望	「人類」，「私のようなもの」，自分らしさ	老化にともなう身体変化に対する対応 新しい役割へのエネルギーの再方向づけ 自分の人生の受容 死にたいする見方の発達	内省	一貫した存在を通して得られる実存，非存在への直面



の生涯体育理論への意義



の諸理論といった、他の有効なパースペクティブから、さらに補強しなければならないであろうし、とりわけ、青年期におけるスポーツへの自我関与とアイデンティティの問題は、今後の体育科教育における生涯体育理論の中心的問題になるものと考ええる。

引用・参考文献

- 1) 文部省, 中学校学習指導要領, 大蔵省印刷局, 平成元年, p. 76.
- 2) 文部省, 中学校指導書保健体育編, 大日本図書, 平成元年, pp. 1-14.
- 3) 熱海則夫監修, 佐藤良男, 浦井孝夫編著, '89告示中学校学習指導要領, 保健体育科の解説と実践, 小学館, 1989年, pp. 9-26.
- 4) ヨハン・ホイジンガ, 高橋英夫訳, ホモ・ルーテンス, 中央公論社, 昭和48年, pp. 11-56, pp. 89-138.
- 5) ミハイ・チクセントミハイ, 今村浩明訳, 楽しみの社会学, 思索社, 昭和54年, pp. 65-92.
- 6) フランク・ゴープル, 小口忠彦監訳, 第三勢力: マズローの心理学, 産業能率短期大学出版部, 昭和49年, pp. 85-92.
- 7) H. J. アイゼンクと G. D. ウィルソン, 塩見邦雄訳, 社会的態度——パーソナリティとイデオロギー——, ナカニシヤ出版, 1981年, p. 28.
- 8) ダリル・シーデントップ, 前川峯雄監訳, 高橋健夫訳, 楽しい体育の創造, 大修館書店, 昭和61年, pp. 200-324.
- 9) 宇土正彦編著, 体育科教育法入門, 大修館書店, 昭和63年, pp. 65-70.
- 10) 糸野豊・佐伯聰夫編著, 現代スポーツ指導者論——その社会的見方・考え方——, ぎょうせい, 昭和63年, pp. 152-157.
- 11) E. H. エリクソン, 仁科弥生訳, 幼児期と社会Ⅰ, みすず書房, 1987年, Pp. 359.
- 12) E. H. エリクソン, 仁科弥生訳, 幼児期と社会Ⅱ, みすず書房, 1988年, Pp. 241.
- 13) E. H. エリクソン, 岩瀬庸理訳, アイデンティティ——青年と危機——, 金沢文庫, 1982年, Pp. 486.
- 14) E. H. エリクソン, 小此木啓吾訳編, 自我同一性——アイデンティティとライフ・サイクル——, 誠信書房, 1989年, Pp. 294.
- 15) R. I. エヴァンス, 岡堂哲雄・中園正身訳, エリ

クソンは語る——アイデンティティの心理学——新曜社, 1988年, Pp. 190.

- 16) バーバラ M. ニューマンとフィリップ R. ニューマン, 福富護訳, 新版生涯発達心理学——エリクソンによる人間の一生とその可能性——, 川島書店, 1988年, Pp. 540.
- 17) 鎌幹八郎・山本力・宮下一博共編, 自我同一性研究の展望, ナカニシヤ出版, 1984年, pp. 9-58.
- 18) 遠藤辰雄編, アイデンティティの心理学, ナカニシヤ出版, 1988年, pp. 11-50.
- 19) 小此木啓吾編, 現代のエスプリ: アイデンティティ——社会変動と存在感の危機——, 至文堂, 昭和49年, Pp. 244.
- 20) ニューマンとニューマン, 前掲書, p. 106.
- 21) ロジェ・カイヨワ, 清水幾太郎・霧生和夫訳, 遊びと人間, 岩波書店, 昭和48年, pp. 15-39.
- 22) J. ピアジェ, 大伴茂訳, 遊びの心理学, 黎明書房, 昭和51年, pp. 27-41.
- 23) 丸山富雄・梶原敏雄, 幼児・児童の運動教育——理論と実際——, 不昧堂, 平成2年, p. 59.
- 24) M. ピアーズ編, 赤塚・森監訳, 遊びと発達の心理学, 黎明書房, 昭和53年, pp. 153-154.
- 25) 鎌ほか共編, 前掲書, pp. 18-28.
- 26) E. E. Snyder, "Athletics and Higher Education: A Symbolic Interaction Perspective", carried in C. R. Rees & A. W. Miracle ed., "Sport and Social Theory", Human Kinetics, 1986, pp. 217-221.
- 27) 中込四郎・鈴木壮, 「運動選手の自我同一性の探究とスポーツ経験 (I)」, 体育学研究, Vol. 30, 1985年, pp. 249-260.
- 28) 岸順治・高見和至・中込四郎, 「自我同一性形成における運動選手としての同一性感の役割」, スポーツ心理学研究, Vol. 14, No. 1, 1987年, pp. 36-41.
- 29) 高見和至・岸順治・中込四郎, 「青年期のスポーツ経験と自我同一性の諸相」, 体育学研究, Vol. 35, 1990年, pp. 29-39.
- 30) 市村操一, 「モラトリアムとスポーツ闘争」, 新体育, Vol. 48, No. 7, 1978年, pp. 25-29.
- 31) 井上俊, 遊びの社会学, 世界思想社, 1984年, pp. 140-155.
- 32) シモーヌ・ド・ボーヴォワール, 朝吹三吉訳, 老い——人生の窮極の意味——, 人文書院, 1967年, pp. 635-640.

A Study on Life-longed Sport in physical Education:  
From the Perspective of E. H. Elikson's Identity Theory

Yuko KUSAKA

This study aimed at re-examining the scheme of life-longed sport in physical education from the perspective of E. H. Elikson's identity theory.

As a result, it was recognized that the scheme of "flow" could be developed into that of sport identity in life cycle. It is a pleasure for a person "to be able to do things which give him a sense of identity".

Significances of identity theory to life-longed sport and physical education were summarized as follows;

1. Infancy.....the development of sensory-motor system, etc.,
2. Toddlerhood.....the importances of sensory-moter system, plays of "mimicry", locomotion ability, and nature and self control, etc.,
3. Later Infancy.....plays of "mimicry", imagination, expression and manipulation, and play with playmates, etc.,
4. School Age.....plays of creation, attainment motive/sense of competence and movement/sport, and interpersonal relationships in play and sport, etc.,
5. Early Adolescence.....the development of body, physical fitness, membership of sport group, and collective identity, etc.,
6. Later Adolescence.....sport as a role-experimentation in "moratorium", bodily sensation of sport identity, and the way and degree of sport involvement, etc.,
7. Early Adulthood.....contemporary meanings of "play", family recreation, sport with friends, and the building up of leisure style, etc.,
8. Middle Adulthood.....leadership in "play" area and the creation of sport culture, etc., and
9. Later Adulthood.....aging and movement, "affluent aging" and sport image, and the implication of sport for life, etc..